

上侍塚古墳

おたから づかみ
栃木県大田原市湯津上地内

発掘調査速報 令和4(2022)年3月16日(水)

栃木県教育委員会事務局 文化財課
宇都宮市塚田1-1-20 Tel. 028-623-3425公益財団法人とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター下野市紫 474 Tel. 0285-44-8441
<http://www.maibun.or.jp>

公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターでは、県内にある重要な遺跡の調査研究とその活用を目指した「いにしえのとちぎ発見どき土器わく湧くプロジェクト」事業として、栃木県の委託を受けて、侍塚古墳(上侍塚古墳・下侍塚古墳)の発掘調査を行っています。初年度となる令和3(2021)年度は、侍塚古墳と周辺の航空レーザ測量を実施したほか、上侍塚古墳の墳丘の周囲においてトレンチ(試掘溝)を設定しての発掘調査を、下侍塚古墳墳頂部と上侍塚古墳墳丘については非破壊での物理探査(地中レーザ探査・電磁探査)を進めています。これまでの調査によって得られた成果をご紹介します。

1 上侍塚古墳

侍塚古墳は江戸時代の元禄5(1692)年に徳川光圀が発掘をした古墳としても知られ、両古墳は昭和26(1951)年に国史跡に指定されています。現在調査を行っている上侍塚古墳は、光圀の発掘以来手つかずのままで、地域最大の古墳にもかかわらず、正確な築造時期や規模などはわかっていません。なお、墳丘は光圀の調査時に新たに土を盛って修復していると考えられるため、築造当時の葺石や段築などは埋もれてしまっていて見る事ができません。

◇上侍塚古墳(前方後方墳)

総長 154m(推定) 墳長 114m
後方部幅 58m 後方部高さ 11.5m



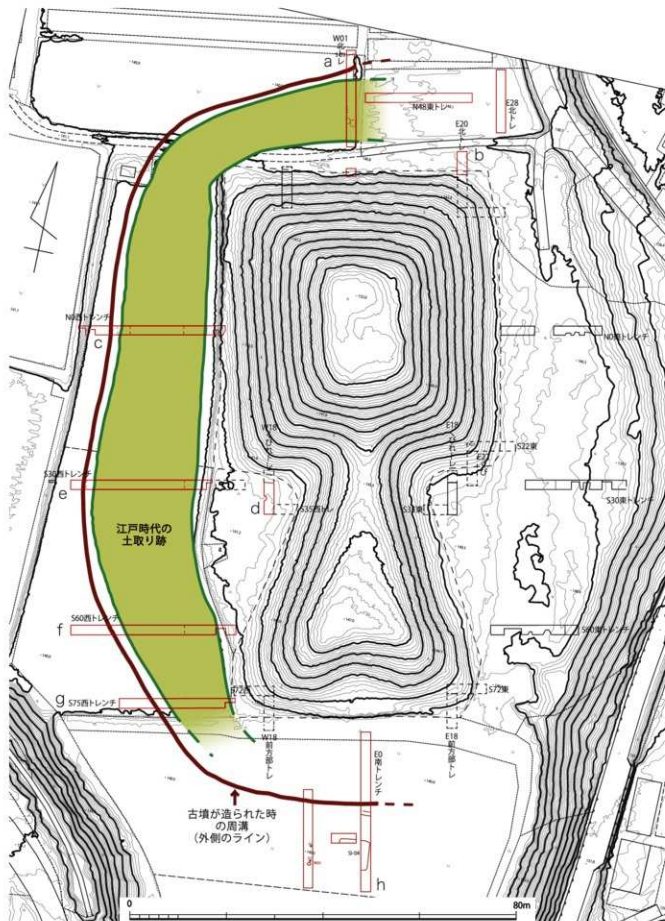
上侍塚古墳 (北西から)

2 トレンチ調査の状況

調査の結果、古墳の東側には周溝と呼べるような掘り込みは認められませんでした。これは、地山が砂礫層のため掘り下げられなかったことが大きな要因と考えられます。ただ、後方部東側は平坦になるよう整形し、くびれ部から前方部は墳丘裾から20mほどをわずかにくぼませるよう手を加えています。一方、古墳の北・西・南では幅約20mの周溝を確認しました。深さは後方部西側で約2mと最も深く、そこから南北に離れるほど浅くなっており、前方部南西では幅もやや狭くなります。墳丘に近い周溝内には葺石が多数転落していて、わずかに土器片も出土します。壺の破片が多く、墳頂部などから転落したものと考えられます。一部のトレンチでは葺石と考えられる石敷きを発見しました。また多くのトレンチで江戸時代に掘削した痕跡が確認できました。これは光圀の指示で墳丘修復を行ったという記録からすると、そのために使う土を確保した跡かもしれません。



出土した壺の破片



a 後方部北(W01北)トレンチ

浅く広い周溝を確認しました。底面は平らで、墳丘近くに転落した葺石があります。周溝覆土上半は徳川光圀の調査時に掘り下げられたとみられます。本来の墳丘裾は江戸時代以降の掘り込みのため確認できません。トレンチ北端では埋葬したと思われる穴を確認しています。部分的な調査のため

め大きさや形は分かりませんが、これを避けて周溝が掘られているように見えるため、上侍塚古墳より古い時期の埋葬施設の可能性があります。



a: (左)木棺埋葬部?
(右)浅く広い周溝



b 後方部北裾(E20北)トレンチ

南から北へと傾斜する石敷きが見つかりました。角度は緩やかですが、古墳築造時の葺石の可能性があります。後方部の北東部分ではこれ以外にトレンチ2本を調査しましたが、周溝は確認できていません。後方部北東に周溝はなかったか、あったとしても浅いものだったのでしょうか。



b:古墳築造時の葺石?

c 後方部西(N0西)トレンチ

幅の広い周溝を確認しました。周溝外側の立ち上がりは急角度ですが、墳丘側はなだらかな斜面で、転落した葺石が多数出土しています。周溝内で出土した陶器片などから、周溝覆土上半は徳川光圀の調査時に掘り下げられたとみられます。また、覆土上部は昭和に水田を作る際に掘削されています。



c: (上)出土した陶器片
(下)転落した葺石



d くびれ部西(W18くびれ部)トレンチ

底面は浅く平らで、くびれ部周辺が周溝よりも一段高い平坦面になっていることがわかります。転落した葺石が出土しています。江戸時代に掘られた痕跡はありません。



d:転落した葺石

e くびれ部西(S30西)トレンチ

後方部西から続く周溝を確認しました。周溝外側立ち上がりは急角度、墳丘側はなだらかな斜面で、江戸時代と昭和の掘削の痕跡が確認できます。



e:周溝および近世土取り跡

f 前方部西(S60西)トレンチ

周溝はやや浅く、幅もわずかに狭くなります。周溝立ち上がりの状況はS30西トレンチと同様で、江戸時代と昭和の掘削の痕跡が確認できます。



f:周溝および近世土取り跡

g 前方面南西(S75西)トレンチ

周溝はさらに浅く狭くなります。周溝立ち上がりは外側、墳丘側ともなだらかになります。江戸時代と昭和の掘削の痕跡が確認できます。



h 前方面南(E0南)トレンチ

前方面南東からさらに周溝は浅くなります。昭和の掘削が大きいため幅は不明です。周溝の南には、焼失したとみられる竪穴建物跡が確認されました。

h: 白線部分が焼失建物跡

3 物理探査(地中レーダ探査・電磁探査)

侍塚古墳(上侍塚古墳・下侍塚古墳)の墳頂部には、徳川光圀が発掘調査を行った際に出土した鉄製品や鏡などを収めた木箱(松材)が埋められたとされています。深さは『湯津神村車塚御修理』によると上侍塚古墳で地表面下3m、下侍塚古墳で2.4m下と書かれています。本当に墳頂部にあるのか、今どのような状態なのかは不明のままです。一方、日本一美しい古墳ともいわれる整った形の墳丘ですが、これは光圀による発掘の際に盛土して修復した結果だと考えられています。つまり今の姿は江戸時代に作られた可能性があり、築造当時の段築や墳丘を覆う葺石などは土の下に隠れて見られなくなっているかもしれません。こうした疑問や課題を非破壊で解決するため、今回地中レーダ探査と電磁探査という2つの物理探査を実施しました。

地中レーダ探査は、地中に電磁波を発信し、地中に存在する反射物(石、空洞、地層の境界など)からの反射を捉えて地中の状況を調査するものです。上侍塚古墳では墳丘全体に、下侍塚古墳では墳頂部に実施しました。これにより墳丘の段築や葺石、江戸時代に墳丘を修復した地点、光圀が埋納した箱などが確認できるのではないかと考えられます。

電磁探査は、電磁場によって金属など電気を通しやすい物体を検出するもので、上侍塚古墳・下侍塚古墳の墳頂部で実施しました。電気を通しやすい銅や鉄製品などに反応し、光圀が埋納した箱の発見を期待したものです。

詳細は現在分析中ですが、地中レーダ探査では、上侍塚古墳の墳丘で平坦面が確認でき、前方は2段、後方は3段に築造されている可能性が高いことが判明しました。また、墳頂部で1.5~4m下に掘り込みがあることを示す反応がありましたが、これが箱の存在を確認することにつながるかどうかはまだわかりません。一方、電磁探査では鉄製品や鏡の存在を示す反応はなかったようです。

